⑧ **磨き（みがき）**

油でみがき、ツチ目を浮き出させる。

⑨ **仕上げ**

図柄や模様にメッキや着色を行って、仕上げを行う。

3 銅 虫 の 歴 史

広島の伝統工芸品の一つである銅虫細工の歴史は古い。370年前の元和５年(1619)、広島藩主として、紀州和歌山から浅野長晟が入国するが、その時、藩主に従って武士だけでなく商人や職人も多く広島に移り住んだといわれる。その中に銅虫細工をはじめたとされる清氏の名がみえる。

清氏は、藩の保護をうけ、扶持米をもらう扶持職人として活躍したわけだが、彼の子孫も銅虫細工の技術を伝えて扶持職人となり、藩主の進物用として、あるいは諸大名からの注文に応じて、火鉢・手水鉢・薬缶・燭台などの銅虫を製作した。

なお、この清氏の流れだけでなく、錠屋や荘屋なども藩の御用をつとめ銅虫をつくっていたという。

銅虫細工は高度な技術を伴うものであるが、『知新集』（文政５年編さん）によると、19世紀初め、城下に15人の銅虫職人がいたことが書かれており、元治元年（1864）の「御領分諸色有物帖」にも20人を超える荘金・銅虫細工職人がいたことが記録されている。

明治以降、職人の数も減少し衰退したようであるが、明治28年(1895)には、吉岡広利が第４回内国勧業博覧会に銅虫を出品、２等賞を受賞している。また、工業学校の校長、尾形作吉は、保田八十吉らとともに銅虫細工の技術の復興に努め、卒業生たちにも研究させた。そのひとり伊藤琢郎は、吉岡広光に教えをうけるとともに自ら研究をつづけ、銅虫を再興させたという。この銅虫細工の技術が今日に伝えられている。

飾 り 皿

学習の手引

第８号

銅　　虫

広島市郷土資料館

〒734 広島市南区宇品御幸二丁目６番20号

☎（082）２５３－６７７１

1 銅虫とは

銅虫は、近世の広島を代表する工芸品の一つで、江戸時代初期、清氏という人によってつくられるようになった銅細工（銅製品）のことである。

銅虫の名は、創始者の清氏のあまりの熱心さに対し、藩主が〝銅の虫〟と称賛したことからついたものといわれ、彼の製作した銅細工が次第に「銅虫」と呼ばれるようになったのであろう。

銅虫火鉢（伊藤笙子氏所蔵）

2 銅虫づくりの工程

1 地金どり（切断）

薄い銅板に、ケガキコンパスなどを使って罫書きを行った上で、カナキリバサミで切りとる。

2 焼きなまし（なまし）

切りとった銅板を、レンガ積みの炉で焼いてやわらかくする。

3 しぼり（絞り）

キヅチやカナヅチで銅板をたたいて形を整えながら、再び焼きなましを行う。このたたいては焼きなますという作業が、30回ぐらい繰り返されることによって、次第に形づくられていく。

花瓶を炉で焼いている

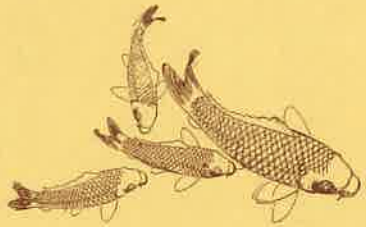
花瓶のしぼり

4 ツチ目入れ（ならし）

カナシキを内側にあて、カナヅチで同じ所を二度たたかないように、全体にツチ目模様を入れていく。

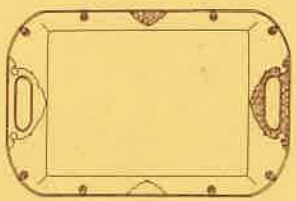
5 彫刻

下絵や模様を描き、タガネ（のみ）で彫刻したり、内側からたたいて浮き出させたり、金銀をはめ込む象眼を行ったりする。



6 整形

口金やモール、縁巻などをとり付けたり、銅虫独特の虫がはっているような虫ばめ（虫鏤）模様を付けたりする。



模様が虫がはったり、食べたりしているように見える。

7 いぶし

イブシガマで、ワラを燃やしながら煙のタール分を表面に付着させる。5、6回これを繰り返すと銅虫独特のしぶみがみられるようになる。

イブシガマ